

日本分析化学会第57年会

1 はじめに

日本分析化学会第57年会は、2008年9月10日(水)から12日(金)の3日間にかけて福岡大学七隈キャンパスで開催された。福岡大学の夏休み明けの講義開始が9月16日であったため、例年より10日ほど早い開催日となった。福岡市内中心部から七隈キャンパスへは、地下鉄七隈線を用いると15分しかかからないので参加者には便利であったものと思われる。講演会場は8号館講義棟とし、受付はプラザ50、展示会場はオアシスとお互いに近接している建物内の施設に設営した。参加者の利便性を考慮し、授賞式及び受賞講演会場も8号館内の講堂式大講義室とした。また、心配されていた台風や風雨の襲来もなく、最終的には講演総数793件(研究懇談会講演16件、授賞講演10件、シンポジウム講演12件を含む)、参加登録者数1331人となり、盛会な年会となった。報道関係への広報活動は9月1日に本部で、9月9日に福岡大学で記者会見が行われた。

2 講演

講演は同一の講義棟(8号館)内の13会場とA棟の1会場で実施された。会場は最低でも100名以上の聴講者が入る講義室を準備し、備え付けの液晶プロジェクターだけで賄えない分に関しては液晶プロジェクターを持ち込んで講演を実施した。講演分類は徳島大会の30分類に新たに英語講演を加えた31分類とした。講演区分によっては、発表件数の増減が著しいものもあり、今後講演区分を再検討することも必要であると感じた。今回、新設した英語講演には16名(外国人11名、日本人5名)の発表者があり、また、講演した外国人研究者にも非常に好評であった。日本分析化学会の国際化のためにも今後もこのセッションが継続されることが望ましいと思われる。本年度の一般講演は10会場で行われ、講演申込数、研究分野の関連性や昨年度の聴講者数などを考慮して、会場の広さや配置を決定した。そのほかに、同一講義棟内にポスター講演会場、シンポジウム会場を設置した。講演分類ごとの発表者数や聴講者数は表1にまとめて示す。

本年度でもパワーポイントによる口頭発表を原則とした。今回は各会場に2台のパソコンを用意し、それらのパソコンをLANケーブルで接続した。講演者が講演データの入ったUSBメモリーを講義室外の受付に渡し、それを講演用のパソコンに転送する方法を採用した。パワーポイント2007に対応するためにパワーポイントビューワー2007を導入していたにもかかわらず、学会初日にファイルがオープンできない等の問題が一部の会場で生じた。しかし、その夜にパワーポイント2007を導入することで2日目以降問題なく講演を行うことができた。初日に生じたトラブルは、後日USBメモリーを介したウイルス感染によるものであることが判明した。このようなトラブルは今後も生じる可能性があるため、今後は講演者が各自のパソコンを持ち込む方式に変更することも検討する必要がある。

発表者が近年増加傾向にあるポスター講演は、すべてのポスター講演を同一会場で行うこととし、さらに付設展示会へ参加者を勧誘する目的もあってポスター会場と展示会場を同一会場で行うことにした。展示会場と同一の会場とした都合でポス

表1 第57年会分類別講演申込及び聴講者数一覧表

分類	一般講演 演件数	英語 講演	最大聴 講者数	一般 ポスター	若手 ポスター	テクノ レビュー
01: 原子スペクトル分析	22		115	12	5	2
02: 分子スペクトル分析	22	1	70	14	6	1
03: レーザー分光分析	10		40	5	3	
04: X線分析・電子分光分析	10	1	40	13	11	1
05: 放射化学分析	1		60			
06: NMR, ESR, 磁気分析	5		30	2		
07: 熱分析				2		
08: センサー	12		40	7	4	
09: 電気化学分析	18		70	6	6	
10: 質量分析	10		70	15	1	
11: 有機微量分析(元素分析を含む)	2		50	1	1	1
12: FIA	6	2	60	4	3	
13: LC	11	2	60	17	14	
14: GC	2		40	4		2
15: 電気泳動分析	9		40	8	1	
16: マイクロ分析化学	16	2	90	1	2	
17: 分離・分析試薬の設計	13		60	10	2	
18: 抽出・イオン交換	26		60	9	7	
19: サンプリング, 前処理	3		40		5	1
20: 分析化学反応・速度論的分析	4		40		1	
21: 標準試料	2		30	3		
22: 基礎理論・基礎データ	4	1	30	5	1	
23: 環境・地球化学関連分析 A	39	2	70	31	14	
24: 環境・地球化学関連分析 B	8	1	50	11	5	
25: 生体関連・医薬・法科学分析	20		100	20	4	
26: バイオ分析	42	2	70	8	17	
27: 無機・金属材料分析	9		40	5	1	
28: 有機・高分子材料分析	6		50	4	1	
29: 界面・微粒子分析化学	38	2	70	9	12	
30: その他	5		50	3	1	
合計	375	16		229	128	8



講演会場

ターの発表件数の上限が、1セッション60件となったため、3日間で6セッションとした。1日目は若手ポスター講演(128件)と一般ポスター講演(52件)を並行して実施し、2日目以降は一般ポスター講演(59件)、3日目は同講演(118件)を実施した。ポスター会場と展示会場が同一だったためか、各セッションとも150名を超える参加者が来場し、活発な討論が行われていた。

3 特別シンポジウム

今年会ではシンポジウムが4件あった。そのうち若手シンポジウムは次の若手企画をお読みいただくとして、実行委員会企画シンポジウムとして3件（そのうち1件は本部関係からの提案）について述べる。これらのシンポジウムは、いずれも口頭講演あるいはポスター講演時間と同一の時間帯で開催した。そのためか、あまり多くの参加者を得られなかったものもあり、シンポジウム企画内容とともに今後の課題として残った。

1) 「分析化学のイノベーションにつながる計測技術」(1日目午後)〔企画提案：脇田久伸(福岡大理)、山田 淳(九大院工)、最大聴講者数 40名〕

新しい計測機器の開発、計測手法の発明は、分析科学分野における格段の発展をもたらす。本シンポジウムでは、ナノスケールの計測や極限に臨む計測により、何がどこまで観えるようになるのか、分析科学にどのようなブレークスルーがもたらせられるのか等についてそれぞれ専門の立場から発明・発見の重要性をご講演いただき、討論を行った。

1. 最表面1-3原子層が検出できる光電子分光装置 EUPS によるナノ材料の評価：富江敏尚(産総研次世代半導体研究センター)、2. 透過型電子顕微鏡で3次元を観る：金子賢治(九大院工)、3. 生体物質の機能、安定性に寄与する水素原子を観測するイノベーション：新村信雄(茨城大フロンティア応用原子科学研究センター)、4. 極限超短パルスレーザーを用いる科学計測：今坂藤太郎(九大院工)。日本分析化学会ではなじみのない方々がほとんどだったため参加者が今ひとつであった。

2) 「化学系研究教育の未来と学協会の役割—日本化学連合の目指すところ—」(2日目午前)〔企画提案：角田欣一(群馬大)、最大聴講者数 110名〕

現在、大学においては、若年人口減少の圧力のもと、運営費・教員数の削減が続き、教育・研究の環境の悪化が進行している。このような厳しい状況は科学技術系学協会活動にも影響を与え、多くの学協会は会員や収入の減少に苦しんでいるのが実情である。こうした状況の下、昨年度、化学分野の学協会が協力して日本の化学の健全な発展を図るために、日本化学連合が発足した。本シンポジウムでは、現在の化学系研究・教育の現状と未来を俯瞰するとともに、日本化学連合の目指すべき諸課題、および日本分析化学会が日本化学連合に何を期待し、またどのような貢献が可能なかを考えることを目的とし6名の方に講演を行っていただいた。

1. 我が国の化学系研究教育の問題点と未来：岩澤康裕(日本学術会議化学委員会委員長)、2. 我が国の研究教育政策と学協会の役割：岩瀬公一(文部科学省科学技術・学術総括官)、3. 我が国の国際的情報発信のあり方：北森武彦(日本分析化学会前筆頭副会長)、4. 日本化学連合の設立の経緯とその目指すところ：御園生 誠(日本化学連合会長)、5. 日本分析化学会の役割と日本化学連合への期待—総論—：渡會 仁(日本分析化学会会長)、6. 化学系学協会の管理・運営・社会貢献をめぐる問題点：中澤裕之(日本分析化学会筆頭副会長)。中澤先生のご講演はご病気のため中止された。

3) 「分析化学が支える社会の安心・安全」(3日目午後)〔企画提案：中島憲一郎(長崎大院医歯薬)、黒田直敬(長崎大院医歯薬)、最大聴講者数 100名〕

現在、社会の安心・安全に対する国民の関心は一段と高まりを見せている。そこで、本シンポジウムにおいては、社会の安心・安全を分析化学がどのように支えているかをテーマに取り上げ、4名の専門家から環境、乱用薬物、食品、医療などに関して、それぞれの立場から紹介していただき、それぞれの現状とこれからの問題点について討論を行った。

1. 大気汚染物質 PAH/NPAH の知られざる健康影響と動



ポスター会場

態：早川和一(金沢大医薬保健薬学系)、2. 化学テロ対処に貢献する分析化学：瀬戸康雄(科警研)、3. 様々な製品に含有される無承認無許可医薬品成分の分析について—違法ドラッグを中心に—：花尻瑠理(国立医薬品食品衛研)、4. パイオマーカー分析がもたらす次世代の健康管理：芝崎 太(都立臨床医学総研)。当日は中島先生が海外出張のため山口政俊先生(福岡大薬)と黒田先生が趣旨説明等を行った。

4 若手企画(若手シンポジウムと若手ポスター講演)

1) 若手シンポジウム「分析化学ボーダーフロンティア」(1日目午後)〔企画提案：梅林泰宏(九大院理)、最大聴講者数 40名〕

「分析化学」は、自然科学一般の基盤をなし、他の学術分野との境界は明確なものではなく、常に新たなディシプリン創生の鍵となりうる。本シンポジウムでは、生命科学や物質科学、地球・宇宙科学など学際領域の境界で活躍する新進気鋭の研究者を招き、分析化学を軸とする Trans-disciplinary や Cross-disciplinary を考えた。

1. 核酸上での分子間相互作用を利用したシグナル変換：井原敏博(熊本大院自然・JST さきがけ)、2. 透過型電子顕微鏡法の地球化学への応用：宇都宮 聡(九大院理)、3. XAFS を用いた溶液界面の分析：谷田 肇(高輝度光科学研究センター)、4. 量子化学による水溶液中の化学過程の自由エネルギー計算—QM/MM-ER 法の開発とその応用—：高橋英明(阪大院基礎工)。

2) 若手ポスター講演(1日目、10:30~15:30)〔企画提案：梅林泰宏(九大院理)〕

本企画では、分析化学の将来を担う大学院生や若手研究者に、社会的ニーズとの関連を踏まえ他の学問領域や産業界への波及効果に配慮して、斬新な研究成果をアピールし、情報交換ならびに交流を深めてもらうためにポスター発表企画を立ち上げて募集を行った。当初は80件程度の講演を予定し募集を行ったところ、128件もの講演申し込みがあり1日目の午前・午後の3回のセッションにわけて発表を行った。本講演では若手ポスター賞を選考した。選考委員には各支部推薦者3名ずつの18名、九州支部推薦18名の計36名を任命し選考に当たった。発表内容を審査し12件の発表をポスター賞として選考し、ミキサー会場にて実行委員長名で表彰し、賞状の贈呈が行われた。

5 付設展示会と要旨集広告

〔企画責任者：財津 潔(九大院薬)、能田 均(福岡大薬)〕

今年会開催日が例年より10日早くなった一方、今年の東京コンファレンスと分析機器展が一週間繰り下がり開催されており、二週続けての分析機器展示イベントということで、付設

展示会への出展件数が確保できるかどうかかなり心配した。しかし、担当委員と広告代理店の明報社が共に関連企業に声をかけていただいたおかげで、27社から最新の分析機器やパンフレットなど企業発の分析化学情報を出展していただけることになった。要旨集への広告も18社にのぼり、そのうち、地元九州から2社が応じていただいた。展示会場とポスター会場は同一会場とし、オアシスに設定した。オアシスは休憩所と軽食販売所を兼ねた学生用施設であったので、会場にする際、休憩用椅子も残し、軽食販売もお願いした。これらの結果、多くの参加者を集めることができ大変な盛況で出展企業にも好評であった。

6 学会賞等授賞式、学会賞講演等

学会賞等の授賞式ならびに受賞講演は二日目の午後より831番教室で行われた。この講義室は、湯川秀樹博士はじめ来学されたノーベル賞受賞者が講演された由緒ある講堂式講義室であるが、最新の映写装置を導入するために本年初旬に全面改装されており、受賞者や参加者には満足いただけたものと自負している。

会場では13時15分より学会賞等授賞式が行われた。渡會会長の挨拶の後、学会賞、奨励賞、学会功労賞、技術功績賞、および有功賞の各審査経過が述べられた後、会長から賞状と副賞が贈呈された。その後、14時30分より学会賞受賞講演が行われた。学会賞講演は尾崎幸洋、升島 努、山田 淳の3氏によって行われ、熱心な参加者から盛大な拍手を得ていた。また、技術功績賞を受賞された作田庸一、鈴木真一両氏、および奨励賞を受賞された上野祐子、内村智博、金橋康二、齋藤伸吾、火原彰秀氏の5名の受賞講演は、関連する一般講演会場で行われた。恒例となっている有功賞受賞者の記念撮影は、授賞式後831番教室前のロビーで行われた。

7 テクノレビュー及び研究懇談会講演

テクノレビュー講演は、分析機器、装置、器具、分析技術及び分析化学関連の情報について講演を通じて会員に発信していただく企画である。テクノレビュー講演は30分の持ち時間で講演することができるため、一般講演よりは詳細な講演内容を伝えることができる。このため発信する講演者（企業）と参加者にとって講演を通じて非常に容易に情報の交換ができることになる。この趣旨をご理解いただいた企業から、8件の申込みと講演があった。

研究懇談会講演もかなりの数に上った。すなわち、12の研究懇談会から計16件の講演をしていただいた。さらにこれらの懇談会の中には運営委員会等を開催され、今後の運営等について熱心に討議されていた。

8 ミキサーおよび懇親会

ミキサー〔責任者：松井利郎（九大院農）〕は、初日18時より145名の参加者を得て文系センター棟16階スカイラウンジで盛大に行われた。開会の挨拶の後、脇田久伸実行委員長の発声にて乾杯を行い、開演した。その後、若手ポスター賞の授与式が行われた。また、余興としてビンゴ大会があり大いに盛り上がった。

懇親会〔責任者：吉村和久（九大院理）〕は、2日目夕方から西鉄グランドホテルにて開催された。359名にも上る予想を超える参加者があり、超満員の状況で懇親会における式典が始まった。まず脇田実行委員長による参加に対するお礼の挨拶の後、横山九州支部長による歓迎の挨拶と開催地福岡の紹介がなされた。その後、渡會日本分析化学会会長の挨拶に引き続いて、来賓としてお招きした本年会の開催校である福岡大学の衛藤学長からご挨拶をいただいた。次に、会長、名誉会員、来賓、



懇親会での金獅子太鼓

実行委員長、支部長等による鏡割りと九州支部参与の大倉洋甫名誉会員による乾杯の発声の後、懇親会が始まった。かなり多めに用意した料理は、質的にはご満足いただいたものの超満員の参加者には少々足りなかったようであった。九州大学にかかわりのある「九州大吟醸」もふるまわれた。懇親会の後半には来年度の第70回分析化学討論会実行委員長の木村恵一和歌山大学教授と第58年会実行委員長の中村 博北海道大学教授からそれぞれの学会の概要説明と参加勧誘のご挨拶があった。続いて余興として博多独楽保存会による博多金獅子太鼓があった。締めくくりに博多のお祝いの歌である「祝いめでた」を全員でうたい、「博多一本締め」をして懇親会を終了した。なお、同ホテルで2次会も開催され、22時過ぎまで歓談が続いた。

9 その他

本年会では、男女共同参画事業活動の一環として会場内託児施設の開設を行った。託児所は講演会場とは別の棟の教室を利用し、運営は企業による委託託児サービスを利用した。実行委員会のホームページや「ぶんせき」のお知らせ欄に託児所の案内を掲載したものの、利用者は3日間で延べ3名にとどまった。今後、利用希望者の意見を集めるとともに本制度を会員に積極的にアピールしていき、託児所利用者の増加を図っていくことが必要であると考えられる。

10 おわりに

学会会員（一般）が10名程度しか在籍しない福岡大学での年会開催ということで、かなりの不安を抱えての実行委員会の発足であったが、本第57年会は約140人の実行委員の方々の献身的なご協力のお陰で、大きなトラブルもなく無事終了することができた。1400名前後（最終的に1331名）の参加者による14講演会場、展示会場、受付、休憩室や試写室、さらには託児所などを3日間にわたって運営するにあたり、前回の徳島年会、前々回の大阪年会の運営マニュアルが非常に参考になりました。徳島大の本仲先生と阪大の渡會先生にお礼申し上げます。学会本部事務局の方々には、準備段階から懇切丁寧に対応いただきました。本年会を開催するに当たり本学の多くの方々にご協力ご支援をいただきました。研究推進部御厨 武課長補佐には施設利用や学会運営上の細部に至るまで懇切丁寧にご教示やアドバイスをいただきました。本学の薬学部、理学部の諸先生には専門外の学会にもかかわらず絶大なご支援ご協力をいただきました。また、実行部隊として約90名のアルバイト学生の皆さんに熱心にお手伝いいただき、スムーズに学会運営を行うことができました。本当にありがとうございます。最後に、本年会運営にご尽力をいただいたすべての皆様に対し、脇田久伸実行委員長に代わり感謝申し上げます。

〔第57年会実行委員会庶務幹事 栗崎 敏〕